

自然資源の活用

安島博幸

YASUJIMA Hiroyuki

立教大学 / 観光学部 / 教授



わが国は、山岳、河川、湖沼、森林などの純粋な自然や地形が創り出す景勝など、豊かで多様な自然に恵まれているところが多い。また、それぞれの歴史のほか、水田、棚田、里山、雑木林などの人為的自然と民家・集落など文化的景観が織りなす日本の伝統的な田園風景も見直されてきている。

一方、自然志向や健康意識の高まりなど、国民の価値観や生活様式の多様化の中で、自然的な魅力に満ちた地方の特性は、生活の場、余暇活動の場としての地方の利点や魅力として積極的に評価されるべきである。自然を活かした地域づくりの方向性も大きく変わりつつある。環境、資源の有限性が強く意識される時代であり、経済的な豊かさとともに、精神的な豊かさとしてのゆとりと美しさに満ちた暮らしを実現することが求められており、今日「自然」に対する価値認識も従来になく深まりつつある。

1——自然とは何か

自然のとらえ方、見え方は、時代や社会によって違うものだ。現在、国立公園などの自然公園やエコツーリズムの対象地、あるいは田舎の農地を中心とする自然など、



■写真1—手入れが行き届いているドイツの田園風景

自然に対する様々な「まなざし」が混在しているのが現在の状況であると言える。「自然」を見る“まなざし”が歴史的に形成されてきた過程について、簡単に整理をしておきたい。

●1 古代～中世

かつては、自然は親しんだり、観賞する対象ではなく、人知を超えた存在として崇められていた。自然への畏れが神の観念として結晶していたと考えられる。万物に靈魂が宿るとするアニミズムの起源でもある。しかし、自然風景の発見は、西洋に較べると東洋の方がはるかに早い時期に起きていることが指摘されている。従って東洋の文化圏に属するわが国では、世界的に見れば早い段階で、和歌・絵画・庭園など芸術のモチーフとして自然の美しさが発見されてきた。すでに王朝時代には、全国各地に歌枕は存在し、名所のミニアチュアが貴族の庭園に模倣された。

●2 近世

近世に入ると自然を対象とする観光が盛んになり、各地の特色のある風景を観賞する習慣も生まれた。松島、天橋立、宮島の日本三景や各地で瀟湘八景の様式を模した八景が誕生した。一定の形式にあてはめて自然の美しさを観賞する見方である。この頃には、参勤交代などの制度によって交通が整備され、庶民も旅がしやすくなった。庶民の旅は、病気治療のための湯治か伊勢参りに代表される社寺参詣の大義名分が必要であったが、安藤広重や葛飾北斎らによって描かれた浮世絵を見ても分かるように、旅の途中で自然の風景を楽しんだことであろう。

●3 近代

近代に入るとこれまでの自然の見方に加えて、西洋からアルピニズム、自然主義など新しい自然観が持ち込ま

れ、小さくまとまった箱庭的な自然から雄大な自然が好まれるようになった。ここで日本人の自然観は大きく変わったと言えるだろう。日本アルプスの風景が新たに見いだされ、北海道の大自然も観光の対象になるなど昭和に入ってから国立公園制定への動きにつながっていく。また東京郊外では、国木田独歩の短編小説『武蔵野』によって武蔵野ブームが起き、どこにでもあった雑木林や田畑の風景が見直された。家族連れで近郊にピクニックに行くのも当時誕生した都市中間層の新しいレジャーのスタイルであり、身近な郊外の自然も新たな意味で発見されたと言える。

●4 戦後

戦後の高度経済成長に伴い公害問題が発生した。きれいな大気や水など当たり前と考えられていたものが失われていったのである。この反省に立って、自然環境の保全の視点が登場し、自然を壊す大規模開発には、厳しい目が注がれることになった。南アルプスや大雪山のように道路計画が各地で中止になったり見直された。ただ、まだこの時点ではエコ・ツーリズムと言えるものは発生していない。

この高度経済成長期には、各地の農村から都市への人口移動が続いた。田舎やふるさとの人々の手が入った自然をどう考えるかであるが、大きく分ければ「自然」の中に入るだろう。「ふるさと」を後に都市へ出てきた人々にとって故郷は、いつの日か帰りたい懐かしい場所になった。

都市人口の増加とともに、田舎や故郷を持たない子供たちも増えてくると、田舎は既に過ぎ去った時代を象徴するノスタルジックな価値を持つ場所になってきている。この当時70年代には、既に「ふるさと村」などの現在のグリーン・ツーリズムにつながる動きも見られるようになった。

●5 現代

自然を大事にする価値観がさらに大きく強くなったのは「地球環境」という視点である。資源の有限性、地球



■写真2—今も残る武蔵野雑木林

温暖化ガスの抑制、オゾンホール拡大など特定の地域や国だけでは解決の出来ない地球的な規模の課題が登場した。観光ばかりでなく、自然環境の公益的な価値を守ることは、重要な社会的テーマになっている。観光の面においてもサステイナブル・ディベロップメントなど環境に配慮した開発が行われるようになり、新しい旅のスタイルとして、エコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムが登場した。これらは従来のマスツーリズムと違い、大量かつ集中する利用の弊害を避け、より自然そのものや地域の文化の価値を深く味わおうとする。そこには自然や文化の価値を正しく伝えるインタープリターやインストラクターの存在がある。

以上、自然に対する考え方や観光の歴史を概観してきたが、人間の自然に対する「まなざし」は、時代とともに変化しているのである。社会的な背景や文化的な状況と大きく関連を持っていることを理解しておきたい。自然の見方は、古い時代の地層に新たな見方を加えつつ、変化し複数の“まなざし”を持つようになっている。

2——自然を活かした観光の現状

自然の名勝や国立公園に対する従来型の観光は、現状では勢いを失っている。これに対し、各地で起きつつある自然を活かした新しい観光のスタイルを紹介する。

●1 エコツアー：白神山地

白神山地が世界自然遺産に登録されたのは、1994年のことであった。それまで、観光ガイドブックには紹介されていなかったマイナーな地域が一躍世界遺産になったのだった。青森と秋田を結ぶ青秋林道の建設工事を契機に自然保護運動が始まったが、まさか世界遺産に登録されるとは当初は誰も夢にも思わなかったことだろう。この地域が世界自然遺産に指定されたのは、ヨーロッパではすでに耕作や牧畜のために切り尽くされ、かつて大陸全体を覆い尽くしていたブナ等の森林が世界的な規



■写真3—白神山地のブナ林



■写真4—インタープリターに教えられてクマガエラの巣観察中

模で残っていることが評価されてのことだった。このような森の価値は、従来の観光的な視点から見ただけでは、それを知ることはできない。何も知らないで白神山地を歩いたならば、ブナの森が延々と続くばかりで退屈をしてしまうだろう。その価値を本当に知るためには、自ら勉強をして知識を得ておくか、現地に詳しいインタープリターと一緒に森を歩くほかはない。世界の中における白神山地のブナ林の価値を語れるインタープリターの存在を抜きにして白神山地の観光は成立しない。ブナ林の目に見えない価値についての知識がこのタイプの観光を成立させている。まったくこれまでとは違う“世界的な視点からブナ林の価値”を見る「まなざし」の存在があるのだ。白神山地の他に、このようなエコ・ツーリズムの代表的な場所は、北海道の知床、釧路湿原、鹿児島県の屋久島、沖縄県の西表島などにある。



■写真5—鴨川市大山千枚田

●2 田園風景：千葉県鴨川市大山千枚田

田舎の自然や田園風景がここで論ずべき自然であるかは、議論のあるところであるが、大きく分ければ自然と言ってもいいだろう。最近、この面で取り上げられているのは、棚田に代表される田園風景である。先駆的な地域は高知県の梶原町でここで第1回の棚田サミットが行われた。また、この町は、棚田を都市住民との交流によって守る仕組みである棚田オーナー制度によっても知られている。棚田サミットは、毎年参加団体、参加者数が増え、今年は9月初めに佐賀県の相知町で行われた。多くの地域では、単に棚田を守るばかりではなく、これを中心に田園風景の保全を図り、田植え、稲刈りなど農業体験を通じた交流事業や生産物の販売などを行っている。棚田も残り少なくなった現在でこそ、農水省が『日本の棚田百選』を指定するなどして守っているが、しばらく前までは、ほとんど観光的な価値を持たなかった。ここにも、棚田に美を感じる“まなざし”の誕生があったといえる。それは、過ぎ去っていく時代に対するノスタルジーなのか、また、地域の伝統文化に対する再評価なのか。

●3 クラインガルテン：長野県四賀村

クラインガルテンとは、ドイツに生まれた市民農園である。都市住民が郊外に小さな農地を借り、そこで野菜、根菜、花などを育てている。“田舎の自然”に親しみながら、農作業を行い、収穫を楽しむ。わが国にも、郊外にあるドイツ型も出来たが、本家にはない「滞在型クラインガルテン」が登場した。その代表が長野県四賀村にある。ここのクラインガルテンには、敷地300m²ほどの農園に約30m²ほどのラウベ(休憩小屋)が建ち、多くの人がここに長期滞在している。私見では頻繁に訪れて農園を管理しなければならないのでこのような形は成り立ちにくいと考えていたが、実際には大変盛況で庭の花壇や



■写真6—鴨川市農産物の販売



■写真7—ドイツのクラインガルテン

畑は手入れが行き届いていた。ガルテナーと呼ばれるクラインガルテンの会員は退職者の方々がほとんどで滞在している人が多かったからである。わが国はこれからさらに高齢化が加速する。退職後は“信州の田舎で農業がしたい”と考えている人は多いそうである。都市と自然に恵まれた田舎とでマルチハビテーションしたいという潜在的な需要は大きい。

●4 ウォーキング：関田山脈トレッキングトレイル

これもまた高齢化社会である証左でもあるのだが、近年の健康志向を反映して自然の中でのウォーキング・トレッキングが盛んになってきている。若い頃にハイキングや登山が盛んだった層が熟年世代となり、再び近郊の山歩きを始めている。東京都下の奥多摩などはそのような人で賑わっている。これには、エコツアー的な面や健康志向などが以前より強くなっていると考えられる。より長距離のトレイルは、オーストラリアやニュージーランドなどのエコツアー先進地において見られる。有名な世界一美しいと言われるニュージーランドのミルフォード・トラックは、途中の小屋に泊まりながら3、4泊かけて歩く。このような長距離トレイルの開発が長野県と新潟県の県境に位置する関田山脈で行われている。約50kmにおよ



■写真9—「森の家」の宿泊者にもボランティアを募ってトレッキングルートづくり



■写真8—長野県四賀村クラインガルテン

ぶトレイルの整備は、飯山市の「森の家」にNPO「信越トレイルクラブ」の事務局を置き、隣接する両県の13の市町村の協力の下に実施される。

3—これからの自然を活かした観光への提言

自然に対する観光、すなわちエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムの計画哲学・理論においては、本来、都市から自然や田園への“まなざし”が意味することへの深い理解と洞察を出発点とすべきである。これからの農山村地域の自然を活用した観光の活性化には、地域住民の自覚的な自然への認識が不可欠であろう。

まず、自然こそが資源であり、これを守ることが大事である。利用のためのものであっても施設の建設などは、自然の本来の価値に対してはマイナスの影響がある。何が価値であるかを十分に理解し価値を損なうようなことがないように十分に配慮すべきである。

次に、自然環境や景観などには代価がつけられないため、観光客が飲食や宿泊などのサービスを消費しない限り地域にお金が落ちず、地域経済の具体的な効果に結びつかない。地域への経済効果をどのように生み出すか、また豊かな自然がいつまでも保てるような“サステイナブルな”開発・運営のシステムを慎重に構築すべきである。

自然が豊かな地域では、特に高齢化が進行しているが、高齢者が地元の生活や文化、地域の価値や意味、解釈の仕方などを伝え、観光客の関心を引き出すインタープリターとして活躍している事例は少なくない。また自分の菜園で採れた野菜を道の駅などに持ち寄って観光客に販売している人も多い。これらは高齢者の生き甲斐となり、地域の活性化の大きな部分を担っている。高齢化が進むわが国では、地方に住む高齢者に対しては、経済的な意味よりもむしろ生き甲斐を創出していくことの意味の方が大きいのではないかと考えられる。